

# 琉球大学学術リポジトリ

## 日本列島古人骨集団における四肢の変形性関節症性変化

メタデータ	言語: en 出版者: 琉球大学 公開日: 2015-11-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 信司, Suzuki, Shinji メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/32355">http://hdl.handle.net/20.500.12000/32355</a>

平成27年7月2日

(別紙様式第7号)

## 論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	鈴木信司
論文審査委員	審査日	平成 27 年 7 月 2 日	
	主査教授	金谷文則	印
	副査教授	前田士郎	印
	副査教授	宮崎哲次	印
(論文題目)			
<p>Degenerative changes in the appendicular joints of ancient human populations from the Japan Islands (日本列島古人骨集団における四肢の変形性関節症性変化)</p>			
(論文審査結果の要旨)			
<p>上記論文に関して、研究内容および研究成果の意義と学術水準について慎重に検討した。</p>			
<p>1. 研究背景と目的</p> <p>変形性関節症は、現代日本人では膝関節に多く発症し、加齢や肥満でその罹患率が高くなるが、生業との関連も示唆されている。この研究は、日本列島における広範な時代と地域から得られた古人骨集団を試料とし、四肢の主要6関節(肩、肘、手、股、膝、足)の変形性関節症性変化(OA)を調査したものである。様々な生業を有する古人骨集団はどの程度OA頻度が違うのか、また、それは当時の人々の生活様式とどのように関連するのか等の検討を目的としている。</p>			
<p>2. 研究内容</p> <p>本研究で用いた集団は、北部九州/山口弥生(農耕民)、西北九州弥生(漁労民)、北海道オホーツク(海獣狩猟・漁労民)、中世鎌倉(都市住民)、近世久米島(農耕民)であり、成人個体を用い、試料数はほぼ各群100例であった。</p> <p>四肢主要6関節における骨棘形成をBridges(1991)の関節症重症度に基づき分類した。粗罹患率は、北部九州/山口および西北九州弥生集団では手と肩関節で高く、前者については股関節でも高頻度であった。両弥生集団では、弥生文化初期からの稲作導入による道具等の使用が手関節OAを増加させた可能性が考えられた。また、炭素窒素安定同位体分析でも示されているように海生哺乳類に強く依存するオホーツク集団は、肘と膝関節OAが高頻度で、肩と股関節OAが高頻度の農耕民(久米島集団)や都市住民(鎌倉集団)とは極めて対照的であった。久米島と鎌倉集団を用いて行った年齢、集団、性を説明変数としたロジスティック回帰分析の結果、加齢変化が示唆された。集団差としては、久米島集団では股関節OA(<math>P=0.014</math>)と膝関節OA(<math>P=0.001</math>)で罹患率が高く、鎌倉集団では椎間関節OA(<math>P=0.006</math>)が多かった。安定同位体分析に基づく、2集団の栄養段階(食性)はほぼ同一と考えられたため、特徴的な作業負荷が影響した可能性が考えられた。</p> <p>以上、生活様式が画一化された現代日本人と異なり、先史時代、中世、近世の四肢主要6関節のOA罹患率は、集団間で大きな違いを示した。</p>			

### 3. 研究成果とその意義と学術水準

この研究は、比較的多くの試料数を有する古人骨集団を対象とし、多変量ロジスティック回帰分析を用いることにより、年齢、性および地域を調整して比較した。その結果、古人骨集団間で OA 頻度の違いを明らかにした意義は大きい。さらに、炭素窒素安定同位体分析等の結果を基に考察を加え、当時の生活習慣・食性と OA との関連を示した研究であり、形質人類学分野や医学分野における学問の進展に寄与するものである。

以上より、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと判断した。

- 備考
- 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。
  - 2 要旨は800字～1200字以内にまとめること。
  - 3 \*印は記入しないこと。